酒井健吉／狂想的司伴樂第一番 ～ボーカロイドと室内管絃樂の爲の～

第一楽章「AMA・WATA・DAMA」（詩・酒井健吉）

アマ　ワタ　ダマ

ナー　トゥラ　タームナ

クバシ　ピル

第二楽章「水の姿」（詩・吉行理恵）

晴れやかな空の色の服を着て

水溜りでころんでしまった　雀斑のある

私は泣きだしてしまいそうにしています

虹は　丸木橋の上に　掛かっています

第三楽章「月光でといだ氷の刃」（詩・銀色夏生）

もろはの刃で月を切る
薄く向こうが透けるよう

月光でといだ氷の刃

私の瞳は空を切る
薄く向こうが透けるよう

月光で鍛えた氷の刃

あなたの言葉は夢を切る
薄く向こうが透けました

第四楽章「間奏曲」

（器楽のみ）

第五楽章「わだつみのこひ」（詩・木部与巴仁）

恐れなどない

恥じらいなどない

このからだ
ありのまま　運命のまま

神の前で結びあった子供として

生きようと思った

この身を焼いて　焼き尽くすまで

第六楽章「百千の」（詩・伊東静雄）

百千(ひゃくせん)の草葉もみぢし
野の勁(つよ)き琴は　鳴り出づ

哀しみの
熟れゆくさまは
酸(す)き木の実
甘くかもされて　照るに似たらん

われ秋の太陽に謝す

第七楽章「雨音」（詩・Kana）

迫り来る雲　触手を広げ
嵐が　嵐が　嵐がやってくる
雨神(かみ)の額から落ちた一滴(ひとしずく)に
気づいた老父は空を見上げた

雨よ　雨よ　何の迷いもなく
思うが侭に支配してゆくのか
麦は濡れ 土を溶かし 蝶の羽をもぎ取ることさえも
何のためらいもないのか

鳥の声も消えたこの瞬間に
僕は見た
必ず雨は止むのだと　信じて疑わないものたちを
もがれた羽から新たな生のあることを

そして彼らのその先に
微かな光が射したのを